

埋もれた文化財の話 26

近江の弥生時代、そのはじまりと展開

1. はじめに

稲穂たなびくのどかな田園風景のなかで、村人が総出で稲刈りを行う。たんぼの向こうには草葺きの家や収穫した米を保管しておく倉庫が点在する。私たちの抱く弥生時代のイメージというのはこのようなものではないでしょうか。このイメージはある一面では合っているかもしれませんが、このような牧歌的な状況が綿々と続いてきたわけではありません。これから述べる弥生時代は、米づくりとそれに伴う水路開削などの大規模な土木技術が大陸から導入され、それに伴い社会が劇的に変化していった時代だと考えられています。巨大古墳が造られ、古代国家が誕生していく、その前段階である弥生時代とはどのような時代だったのでしょか。

2. 近江で米作りが始まった頃

今から約2,300年前、日本列島に大陸から稲作が伝わってきました。イネそのものはすでに縄文時代後期には伝わっていた可能性が指摘されていますが、イネだけではなく、それを栽培し、収穫する、という一連の技術が列島にもたらされたのはこのときになってからです。



守山市服部遺跡 水田跡(前期)

「稲を作る」ためには、様々な技術と道具が必要です。たんぼを作り、水を管理し、苗を植え、草を曳(ひ)き...、という地道で継続的な作業です。クワやスキなどの土を掘る道具や石庖丁(いしぼうちょう)のような収穫具も必要です。これらの道具を手に入れ(あるいは自ら作り)、たんぼやそこに水を引く水路を作っていくことは、一人では無理でしょうし、当然同じように米を作ろうとする仲間たちとともに作業をしていくことが必要となります。多くの人々がそれぞれに役割を分担し、彼ら(彼女ら)を束ねるリーダーが統率していく.....。弥生時代は日本列島のなかで、そのような集団が発生・発展していく段階だった、と考えられています。



稲の穂束(中期：安土町大中の湖南遺跡)

これまでのところ、近江で米を作った跡が確認されているのは、守山市の服部(はっとり)遺跡や安土町の大中の湖南(だいなかのこみなみ)遺跡などです。このうち服部遺跡で見つかった水田跡は弥生時代前期のものと考えられており、県内では最も古いものとされています。

3. 弥生人と縄文人

さて、米づくりの技術を携えてやってきた弥生人ですが、旧来から住んでいた縄文人の間には軋轢(あつれき)はなかったのでしょうか。それを考古学的に証明することは困難ですが、出土する土器などをもとに、ある程度推測することは可能です。

縄文時代の終わりから弥生時代の最初期の遺跡を調査すると、縄文時代の特徴を持った土器(「突帯文土器」：とったいもんどき：下写真)と、弥生時代の特徴を持った土器が混在して出土することがたびたびあります。このようなことから考えると、この近江にやってきた弥生人は、多少の衝突はあったかもしれませんが、比較的スムーズに、もともと住んでいた縄文人のムラと交流を深め(もしかしたら一緒に住んでいたかもしれません)、徐々に溶け込んでいったのかもしれません。



弥生時代初め頃の土器
(栗東市霊仙寺遺跡)



縄文時代終わり頃の「突帯文土器」
(多賀町土田遺跡)

4. 「近江」の地域性

近江に米づくりがもたらされて弥生時代が始まると、縄文時代から比較して遺跡数が増加傾向をたどります。米づくりは土地を改変してその基盤を作りますが、そうすると、今度はそのたんぼを守り続けていく必要があります。また、家族をはじめとする村の人口が増加していくと、それに見合った生産量が必要となってきます。そうなるとどんどん耕作に必要な土地を開墾(かいこん)していく必要が生じてきます。このようにして、米づくりが始まってしばらくすると、近江では弥生ムラの数が爆発的に増加していきます。親ムラから分かれた新しいムラはそれぞれのつながりを保ちながら物・情報のネットワークを作っていたのではないのでしょうか。

考古学的に見出せるこの時期の特徴としては、毎日の生活に使う土器に近江独自の意匠(いしょう)が表れるようになる点が挙げられます。具体的にはうつわの口の部分に段を設け、蓋を置きやすいようにした、「受口状口縁」(うけぐちじょうこうえん)と呼ばれる特徴を持つものがそうです(下写真)。



受口状口縁土器(守山市服部遺跡 後期)

「近江独自の意匠」と書きましたが、実際は他地域の土器の影響を受けて出来たものですが、しばらくすると、近江の中で固有のものとなりました。流行のきっかけはよそからの真似であっても、それが琵琶湖を中心に広がる近江という一地域で独自に進化していったひとつの例です。

5. ムラの暮らし

さて、弥生人たちはたんぼを維持するために集団で共同作業を行いながら日々の暮らしを過ごしていったわけですが、その彼らの住む村はどのような様子だったのでしょうか。弥生時代のムラを発掘すると、必ず出てくるのが、竪穴建物(たてあなたてもの)の跡です。そしてこれに加えて、掘立柱建物(ほったてばしらたてもの)があるのが基本的なパターンです。また、最近の成果からは類例の少ない「壁立式建物」(かべだちしきたてもの)なども確認されています。

現在では琵琶湖を中心に「湖北」「湖東」「湖南」「湖西」などというような大まかな地域分けをしますが、弥生時代でもそれぞれの地域ごとに大規模な集落跡が存在します。そのような集落では、集落を取り囲む大きな溝があり、これを環濠(かんごう)と呼んでいます。



竪穴建物と環濠の様子(守山市二ノ畦横枕遺跡)

近江の場合、明確な環濠を有する集落は意外と少なく、特に弥生時代中頃の湖南地域の下之郷(しものごう)遺跡などの環濠は有名ですが、湖東・湖北地域などでは、環濠のように明確な集落を取り囲む溝というよりは、集落の中に幾重にも水路が延びている、という遺跡の方が主流となります。

ちなみに環濠集落は、米づくりが日本列島に伝えられたときに一緒に入ってきたともいわれています。しかし、県内では長浜市川崎(かわさき)遺跡が弥生時代前期の環濠集落と考えられていますが、その他に弥生時代初め頃の明確な事例は今のところ見つかっていません。

6. ムラのマツリ

弥生時代の出土品の中でも、とりわけ祭祀(さいし)性の強いものとして考えられているのが、「銅鐸」(どうたく)です。現存する国内最大とされる銅鐸は、滋賀県野洲市の大岩山で見つかったものです。この大岩山では、これまでに合計 24 個を数える銅鐸が見つかりました。

この山麓から最初に銅鐸が出土したのは、明治 14 年(1881)のことです。現存最大の銅鐸を含む 14 個の銅鐸が発見されました。

さらに、昭和 37 年(1962)、大岩山付近において、東海道新幹線建設のための採土現場から銅鐸 10 個が発見されました。残念ながら不時の発見であったため、銅鐸の正確な出土状況は分りませんでした。しかし、その後、関係者からの聞き取りや、銅鐸の表面に残された土砂の付

着状況等を詳細に調査した結果から、大中小3個単位で入れ子にされた銅鐸が3組、互い違いに接し合う状態で、穴の中に埋納(まいのう)された状況が復元されています。なお、残り1個はやや離れた地点から出土したようです。



昭和37年発見の銅鐸(左)と見つかった時の様子(右)

これらの、24個にもおよぶ銅鐸群の解釈をめぐっては、さまざまな仮説が提示されています。「周辺の村々へ配布した残りをまとめて埋納した」、「周辺の村々が所有していた銅鐸は、これらの村が統合されていく中で、中心となる大岩山銅鐸群の所有者のもとに集められた」とする説などがあります。

いずれせよ銅鐸は、弥生時代の近江において一定の政治的な統合が進みつつあったことを示している好資料といえるでしょう。

7. 死者と残されたもの ~ 墓と木偶 ~

弥生時代になると、近畿地方では、従来の土坑墓(どこうぼ)に加えて木棺墓(もっかんぼ)、方形周溝墓(ほうけいしゅうこうぼ)などの墓が見られるようになります。方形周溝墓とは、溝を四方に巡らし、マウンドを持ち、その中に木棺や土坑などの埋葬施設(まいそうしせつ)がつくられているお墓で、前期以降、近畿地方を中心に多く見られるようになります。



方形周溝墓が密集している様子(守山市服部遺跡)

これらのお墓には遺骸とともに納められる副葬品(ふくそうひん)はほとんどありませんが、方形周溝墓の溝からは、お供物を入れていたとおぼしき土器や、葬祭などの際に使われたと考えられている木偶(もくぐう)などが発見されることがあります。



8. おわりに

以上のように弥生時代の人々の暮らしは、それまでの縄文時代と比べると、社会的なまとまりが強くなり、集団に依存した生活を送るようになったと考えられます。

その背景には「米づくり」といった、集団で行わなければ

難しい食糧獲得方法が生活の中心になっていったことがあると考えられます。より大きな集団への帰属を求めて、銅鐸の大量埋納に見られるような、例えば集団の統合が図られたり、木偶などが示す墓域での祭祀的な行為は、そんな集団の中での意思統一を図ったりするうえでは有効であり、また必要不可欠だったのかもしれませんが。

木偶(中期:野洲市湯ノ部遺跡)